市長インタビュー

銚子市長　越川信一

テーマ「財政再生と市立病院の再建に取り組む」

2014年7月23日　銚子市役所にて

聞き手　**佐藤　晴邦**　千葉県地方自治研究センター副理事長
　　髙橋　秀雄　千葉県地方自治研究センター副理事長
　　申　　龍徹　千葉県地方自治研究センター主任研究員

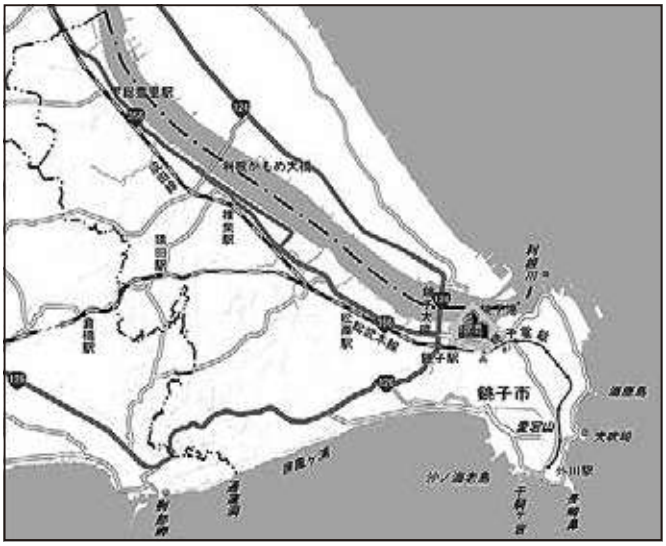
銚子市長
越川信一（こしかわしんいち）

1961（昭和36）年銚子市生まれ、53歳。
慶應義塾大学経済学部卒業、銚子市議会議員を経て、2013年（平成25）年５月銚子市長就任

＜銚子市の位置と市域図＞

（銚子市の紹介）銚子市は、昭和８年２月11日、銚子町、本銚子町、西銚子町、豊浦村の３町１村が合併し、全国で116番目、千葉県では千葉市に次いで２番目の市として誕生しました。その後、昭和12年に高神村、海上村、昭和29年に船木村、椎柴村、昭和30年に豊里村、昭和31年に豊岡村と順次合併し、発展してきました。三方を水に囲まれ、利根川河口から君ケ浜、犬吠埼、屏風ケ浦に至る海岸線は、砂浜あり、岬あり、断崖絶壁ありと、変化に富んだ雄大な景観美を織りなしています。

また、全国屈指の水揚げ量を誇る銚子漁港、日本一の春キャベツなどを育む豊かな東総台地、歴史と伝統を実感できる醤油工場、さらには、これらの産業基盤から産出される豊富で新鮮な食材や特産品を備えるなど、多くの地域資源に恵まれた魅力あふれるまちです。



（髙橋）本日は、お忙しい中、お時間を頂き、誠にありがとうございます。私どもの千葉県地方自治研究センターは、2009年に一般社団法人としてスタートし、研究者や議員、職員、OB、一般市民が中心となり設立しました。千葉県の地方自治について調査研究を行っている唯一の専門機関でありまして、千葉県における行政サービスの比較調査研究や月例研究会などを開いて地域の取組みを調査する一方、連合千葉議員団会議と共同研究を進めるなど、千葉県の地方自治の発展に向けて積極的に取り組んでいるところです。その成果は、年３回の情報誌（自治研ちば）をはじめ、講演会などのイベントを通じて広く情報発信しています。

これまで、県内の自治体の首長を対象としたインタビューを実施していますが、なかなか好評を得ています。今回は東総地域の中心市でもある銚子市のまちづくりを中心にお話を伺うことになりました。どうぞよろしくお願いします。それでは、早速ですが、質問に移りたいと思います。

■市長になって１年の感想

（佐藤） 越川市長は、銚子市議会議員（２期）を経て、昨年（平成25年）４月の市長選で当選し、市長就任から丸１年が経ちましたが、はじめにその感想をお願いします。

（越川市長） まず、議員時代にもそうでしたが、銚子が良いまちであるとの認識がもっと強くなりました。良いまちなのに、元気がない、活力がないのは何故なのか。その辺を探求しながら、このまちを元気にするのが私の使命だと感じています。銚子というまちを大好きになって、良いところをたくさん見つけていこうよというのが基本姿勢だと思います。「どうせ駄目なんだ」という後ろ向きではなく、職員も市民の皆さんも銚子ってこんなに素晴らしいまちだという前向きの気持ちをもって銚子を盛り上げていこうという意識を確認しながら行っていくことが大事だと思います。

個人的な話になりますが、市長になってから、気力と体力と判断力を鍛えていこうと意識が強くなりまして、頭で考えるよりも小さなことでも素直に体当りしていくことが大事じゃないかと考えています。３.11の大震災の際に市庁舎の空調設備が壊れてしまいまして、現在直しているところですが、１階以外はまだ修理が終わらなくて、夏場は暑さと闘いながら仕事をしています。

昨年の夏、このままでは体力が持たないだろうという経験をしたものですから、暮れからジムに通い、水泳や筋トレをしながら体重を５キロほど落とし、とにかく夏場を乗り切ろうと思っています。今年で２回目になりますが、11月にはハーフマラソンがあり、個人的な目標では、21キロを完走したいと思っています。

市長になってから感じることですが、当然のことかもしれませんが議員時代に比べますと、情報量が圧倒的に違います。首長は、何百人の部下を持っていますから、ほしい情報があれば、職員から情報が上がってきます。もちろん、情報の中には、良いものも悪いものもありますが。それに比べると、議員のときの情報は、特に銚子市の場合は首長と議会の関係が対立的な関係にありましたので、調査依頼を出してもなかなか情報が出てこないことが多く、中でもマイナスの情報は特に出てこない。銚子のような小さな自治体の議会事務局の場合は、決まった手続きしか行いませんので、調査や研究関係の情報収集はほとんどできません。

その反面、首長の場合は、様々な情報が入ってきますが、それをどう活かすかは首長の姿勢によって違ってきますので、その分だけ責任は重いと感じています。

私は議員として１期半（平成19年から25年２月まで、市長選のために辞職）を経験しましたが、その間は、議会と首長の間が緊張関係といいましょうか、対立の関係にありました。専決処分もありましたし、否決され、再議にかけ、再び否決されて原案執行されることもありました。それは何故なのかを考えますと、やはり基本的な行政情報が共有されなかったためと思います。

首長と議会の関係の中で緊張感がないのも良くないと思いますが、過度な緊張関係や対立が生じているのも良くないと考えています。市長選のときも、対立ではない対話の関係に戻したいというのが私の主張でもありました。

■銚子市の財政状況

昨年の５月の市長就任後に職員から銚子市の現状についてのレクチャーを受けたのですが、その中で示されたのが、銚子市の今後の財政推計というものでした。もちろん議員時代には見せられていませんが、銚子市の財政状況がこういう風になっていると聞いて大変ショックを受けました。

新聞報道にもありましたが、昨年の５月の時点で、何も手を打たなければ単年度で６億円の赤字であり、その後も毎年５～６億円の赤字が積み重

なっていくことが分かりました。このまま行くと、財政再生団体になるということでした。本当にショックでした。そこで、何故、議員の時代には示されなかったのかと質問しましたが、やはり当時の首長の判断で、マイナスの情報は公開したくないという姿勢であったと思います。

市長選のときは、いろいろな公約を掲げましたけれども、財政状況を改善していかなければ、何もできないと思いました。それで、できるだけ議会とは情報共有したいという基本姿勢で政策運営を行っています。もちろん、公の場で共有したいと思いますが、場合によっては、会派ごとに意見交換を行う、良い意味での根回しをしています。それでも反対される議員は反対しますが、こういう気持ちで議案を出す前に意見交換を行い、情報共有を図るということは今も継続しています。

■市役所の文化

もう１つは、市役所の文化と言いましょうか、例えば、組織、仕組み、意思決定の仕方というものがありました。私は行政職員の経験がありませんので、分かりませんでした。市長になって１年程度経過して感じるのは、市役所の職員は優秀だということです。法律、制度、事務事業などに成熟しています。そして、非常に慎重です。行政という間違いがあってはならないという大原則がありますので、慎重です。逆の意味で言いますと、新しい事業に対して今ひとつ踏み込みが弱いと言いますか、新しいことにチャレンジするのが苦手なんだなと、これが市役所の文化なのかと感じています。

市長は、管理職の部長や課長をリードする立場であります。部長や課長が動かない場合は、リーダーシップを発揮しないといけませんが、市長があれこれと、指示ばかりするわけにはいきません。むしろ課長や部長からこれをやりたいと下から湧き上がることが大事じゃないかと思います。部長や課長が熱血的にチャレンジしないとなかなか進まないと思います。

■無作為抽出による市民参加

もう１つは、昨年12月に事業仕分けがあり、もちろんこれについては賛否両論ありますが、これを実施して感じたことです。事業仕分けは、市民判定人の方が１つ１つの事業を仕分けするというものですが、この市民判定人は公募で選ぶわけではなくて、住民基本台帳から無作為抽出しています。参加の意思表示をした方に参加していただき、○・×・△により判定する仕組みなんです。実は、いろいろな審議会や協議会をやるときに、公募でやると毎回同じ方が公募してきます。声の大きい方、何でも積極的にやる方、残念ながら何でも反対の立場の方など、両極端の方が集まってくる感じでしたので、無作為抽出という方法はとても良いと感じました。

普段は公募しても集まらない、自ら進んで市政に参加しようとしない人々ですが、無作為抽出による参加者の中には、非常に良い意見を持っている方がいるのに感心しました。例えば、公募で100人の方が集まったとすれば、そのうち５人は何でも協力しますという方、また５人は残念ですが何でも反対する方、残りの90人は無関心で、政治やまちづくりには関心がない方と思っていました。しかし、実はそうではなくて、場を与えられれば、能力も発揮するし、自分の意見を発言する方も結構いるのです。

無作為抽出で、残りの90％をどうやって関わってもらうのか。よく協働と言いますが、そこが勝負じゃないかと思いますね。いつも出てくる５％の方に協働という形で関わってもらうことはいつも行っていることですが、無関心だと思っていた大多数の人をどうやって活かすかということがこれからのまちづくりのポイントかなと、思いました。

（髙橋） 抽選で当たった方はすんなりと出てくれますか。

（越川市長） そんなにすんなりはいきませんでしたが、それでも出席率は結構高かったです。正直、無作為抽出という方法で、いろいろな意見が出てくるとは思いませんでした。

もう１つは、市役所の職員は、市民から苦情を言われるものですから、どうしても対等な関係は築けないですね。苦情を聞かされていて、どうしたら対等な関係ができるのかなと。いまだに疑問でありますが、いつも腰を低くしています。

（髙橋）それが市役所の悪いところですよ。私も市役所の職員をしていて感じました。

（越川市長）本当は言いたいことがあるのに言えなくて、本当は対等の関係にあるべきですが、そこまでどうやって持っていくか、１つの課題かと思います。

■財政危機の原因

（佐藤）職員からの将来の財政見通しについてのレクチャーの中で、ショックを受けたとお話しがありました。市長の政策の中で財政の立て直しを掲げていますが、財政が厳しくなった原因について、もう少し伺いたいのですが。

（越川市長）平成25年度は何もしなければ６億円の赤字になるという推計があり、このままいくと、平成29年（2017年）には、財政再生基準を上回る状態になる33億円の赤字が出ると。とても事業はできないと思いました。市役所の庁舎も耐震性がものすごく悪くて、IS値が0.13で致命的な状態ですので、建て替えまたは耐震化もしなくてはならない。ごみの焼却施設が老朽化して、銚子と旭、匝瑳の３市でごみ処理をしようとしていますが、その費用も見込んでいません。水道も浄水場を建て替えないといけないし、やらなければいけない事業がたくさんあります。そのような事業を全然見込んでいないのにこんなに財政が酷いということには、本当にびっくりしました。

こんなに財政状況が厳しくなった理由はたくさんありますが、まずは、他の市に比べて人口減少が急速に進んでいることがあります。今も1,000人程度、昨年は1,200人の人口減少があって、当然税収も減るし、国勢調査に基づく交付税も減ってきます。一方で、社会保障の支出は減らないし、大規模な事業を進めてきたために、公債費が増えている状況です。平成16～17年にかけて東庄町と合併を進めたのですが、結局うまくいきませんでした。周りは合併しましたので、合併特例債や交付税の加算などがあり、隣の旭市と銚子市を比べると、交付税の差が30億円あります。

それから病院への繰出しがあります。これが想定外でした。平成22年度に市立病院が再スタートしましたが、この年に指定管理者への委託料が３億4,000万円あって、23年度には８億6,000万円、24年度には９億3,000万円、３年間で21億3,000万円の委託料を支出しています。このままでは財政がもたないということで、市では３名の参与を任命して、病院へのチェックを入れまして、９億3,000万円あった委託料を６億7,000万円に、２億6,000万円くらい削減しました。さらに、今年度はそれを５億円に抑えようとしています。

それから起債・公債費が増えましたけれども、千葉科学大学を誘致するのに77億円、保健福祉センター、市立高校や給食センターの新築などもあり、借金に伴う返済額が膨らんでいるといえます。一般会計の起債残高が約300億円あり、実質公債費比率と将来負担比率は、県内では千葉市を除いて、それぞれワースト３位とワースト１位という状況です。財政規模に比べて起債の比率が大きいということです。

ただ、行政改革もかなり行ってきました。また土木費、道路予算の場合は予算措置ができなくて要望はあっても直せない厳しい状況です。人口が減っている状況ですが、公共施設、特に学校の統合が進んでいません。今、銚子では１年に生まれる子どもが約350人弱です。市内に小学校が13校、中学校が７校の状況で、１校当たりの児童数・生徒数は少なく、部活の場合も、昔の銚子は野球の名門と言われていましたが、野球部も単独で組めない学校がいくつもあります。

■市立病院の再建

（佐藤）財政状況が厳しい要因のお話しがいろいろありました。その中で、市立病院が６年前に休止し、いろいろな議論があったと思います。市長選でも争点となりましたが、休止以降の病院の

現状と再建にむけた取組みを伺います。

（越川市長）その経過から説明しますと、平成20年ですからもう６年前ですが、その年の９月に、銚子市立病院（総合病院）が突然休止しました。全国的にマスコミに報道され、地域医療の崩壊として伝えられました。当時の病院は、全部で393床、常勤の医師だけで35名の大きな病院でした。以前の市議会の一般質問では、病院の待ち時間をどうやって短くするのかが焦点でしたので、患者が多くて問題になりましたね。

それが医師臨床研修制度の変更にともない、日大の教育関連病院でしたが、その日大から医師の派遣が難しいと、引き上げが始まりました。それが一番の原因ですかね。最後は常勤医師10人程度の規模になりました。その10人もやめるということでした。その結果、平成20年の９月に休止することになりました。

この間は公設公営で運営してきましたけれども、平成22年の５月に今度は指定管理者制度で公設民営の形で新しい病院をスタートさせました。最初は、外来からで、指定管理期間は５年間ということでした。ちょうど来年３月で期間が終わりますが、この後をどうするかが課題となっています。もう一回継続して契約するのか、他の方法（形態）でやっていくのかで、今年の２月に検討委員会を設けて、ここまで５回、議論を重ねてきました。７月30日に第６回を開いて、最終的な答申をまとめる状況になっています。指定管理者ですが、普通は、これまで関連事業を行ってきた民間の医療法人、実績のあるところに指定管理をお願いするわけですが、銚子市の場合は集まらないだろうということで、市が全額を出資して新しい医療法人を作り、そこに指定管理を任せてきました。全国でも３例しかないことです。検討委員会の中で議論していますが、これがなかなかうまくいきません。指定管理者制度は、本来は民間の経営能力を働かせるのが一番の趣旨ですが、銚子市と指定管理者の間で繰出しの上限額の定めができず、赤字についてはいくらでも補てんしますよという契約になっています。そのため、どうしてもコスト意識が働かず、先ほど話したように年間８～９億円の赤字が続いてきました。それを踏まえて、どうするかを考えています。

検討委員会の中での議論の中心は、公立病院としてどういう役割を担っていくのか、ということです。かつての総合病院時代には３次医療に近い２次医療を行って、脳外科もありました。そのような状況に戻すということは現実的には不可能ですし、コストもかかります。隣の旭市には、旭中央病院という２次医療圏の基幹病院があります。そこを中心として地域の医療を組み立てながら、市立病院としての役割を作り上げていくとい

うスタンスですね。具体的には、病状が重い方はまず旭中央病院で治療を受けて、そこを退院した後は市立病院で治療を受ける、リハビリを担当する、医師会との連携をしっかりしていく。病診連携の中心になるような病院を目指すということです。それが公立病院の役目かなと。

地域包括ケアが、これからの医療・介護分野の流れとなっています。保健・福祉・医療が連携しながら、病院・施設・在宅の役割の分担の中で、病院が場合によっては訪問診療・在宅医療を担える方向性も追求していかなくてはなりません。民間病院と競合しないように、市立病院がやれること、あるいは政策医療などを進めていきながら、役割と健全な経営を目指すのが基本的な方向だと思い、その修正を行っているところです。

■市立病院休止の反省点

（佐藤） 休止という異例の事態を受けての対応は、大変かと思います。病院の休止前から市長が１期で交代する事態が何代か続きました。病院の立て直しには、時間をかけて１つの方向に向かって取り組むことが重要だと思いますが。

（越川市長） 今度の香取市の市長選でも山武市の市長選でも、病院問題が焦点になりましたね。東金市もそうだし、激しい選挙戦になりましたね。銚子の歴史を見ても、政治的な争点になり、振り回されたことになります。政治に振り回されないことも重要な点です。

もう１つは、これまでの公設民営の反省があります。市が管理・監督（チェック）をあまりしてこなかったことが非常に大きい反省点です。本来ならば、民間に任せて効率よく行ってくださいということですが、多額の赤字を補てんすることを考えれば、その辺を改善させることが市の責任です。それを行ってこなかったと反省しています。市が介入しすぎるのも良くないのですが、あまり関わらなすぎることも良くないと思います。公設民営・公設公営、それぞれのメリット・デメリットを把握し、落とし所を見つけていくのが必要ではなかったのかと思います。

もう１つは、科学的と言いましょうか、客観的と言いましょうか、きちんとしたデータをまず分析しながら、その上で議論をしていくのが必要なのかと思います。医師会だとか、行政だとか、介護だとか、議会、医療機関などが同じテーブルの上で同じデータに基づいて議論することが足りなかったのが反省点です。政治に振り回されないためには、やはり客観性が必要だと思います。

■人口減少の現状と対策

（佐藤） 人口減少の話が出ました。人口減少は、日本全国どこでも共通の課題です。銚子市の人口減少･少子化対策について､現状と対策を伺います。

（越川市長） この問題に関しての特効薬はないと思います。若年の女性人口の減少が指摘され、消滅可能性都市というような、センセーショナルな報道がされました。銚子市も千葉県内で、若年女性の減少率が１位だという推計が出ていますが、子どもを産み育てる若い女性にどうやって銚子市の魅力を感じてもらえるか、住んでもらうかを考えるのが人口減少対策の１つかと思います。人口を減少させないのは難しいのですが、緩やかにするのは必要かと感じました。

また、どこの自治体でも子育て支援を行っていますが、隣に茨城県の神栖市という裕福な（財政力指数は全国でも上位ですからね）自治体があって、そこのサービス水準と比べてしまうとやはり大きな水準の差があります。例えば、学校の給食については、神栖市の場合は補助を入れています。銚子の学校給食費と比べますと約半分程度の額です。保育料も隣に行けば、２割程度安くなります。高齢者も65歳以上になりますと市内のバスは無料で乗れます。高いサービスを展開していますので、サービスの水準では太刀打ちできない。おまけに、土地も安く、家を建てるなら、神栖に引っ越しすると。大きな声では言えませんが、銚子市の職員の中でもそういう人が少なくありません。

同じ土俵では太刀打ちできませんので、銚子は銚子の良いものでアピールしようと考えています。例えば、地震に強い地盤、高台があり津波にも強

いなど、そういうことを訴えていますが、経済的な側面での格差は大きいですね。

もう１つは、今銚子では外国人の方が増えており、全人口約67,000人のうち、約2,000人が外国人で、研修生などが、銚子の水産加工や農業などに従事しています。そのような人たちを生活者として大切にする政策も必要かなと思っています。

（佐藤） 全国の合計特殊出生率をみると、東日本より九州や沖縄のほうが何故か出生率の高い地域が多くあります。ちょっとだけ調べましたが、千葉県内では館山市が高い。その意味で地域間格差と言いましょうか、単純に考えれば、経済や裕福さだけではない、支え合う、子育てしやすいという環境的なものがあるのかと思います。千葉市の団地のように、急激に高齢化が進む、大都市の中の空白の部分がもっと深刻と言われますので、銚子のように、地域の支え合いが残っているところが対策の打ちようがあるのかという感じもしますが。

（越川市長） その意味で、手立ては、必ずしも経済的な豊かさだけではないと思います。東京は女性が仕事するから子どもを産めないと言いますが、実は仕事をする割合はもっとも低い。それでも子どもが生まれないのは何故なのか。沖縄は、都会ほど経済的には豊かではないけど、元気な子どもがたくさんいる。銚子も農家、漁業もそうですが、地縁・血縁関係がしっかりしているので、同居もそこそこ多い、親が周りにいることもあり、子育ての環境はそれほど悪くないと思います。でも、出生率は低い。独身率が高い、理由は分かりませんが。結婚して神栖に移ることが原因ですかね（笑い）。そこが大きいかなと。

（佐藤） なかなか良い方法は見つからないのですが、館山のようなところも頑張っていますので、銚子もいい方向を検討して、住みよいまちとして成長してほしいですね。

■まち活性化の対策

（髙橋） ところで、まちおこしの目玉政策をお伺いします。例えば、漁業などを中心にとか。

（越川市長） 具体的な政策はいろいろありますが、中でも、若い人の活用・育成が重要で、生き生きとしたまちづくりを進めたいと考えています。銚子市役所も高齢化が進み、これからの未来を切り開くためには、若い人が情熱をもってチャレンジをすることをシニア世代が応援していく、後押しして支えるのが基本かなと思います。

市役所でも、昨年、若手のプロジェクトチームをつくり、空調設備が壊れていることもあって、ポロシャツを第１弾として作りました。その後、９つの提案があり、空き家バンク、２世代住宅の新築時の補助金、子育て応援用のポータルサイトなど、検討しています。職場と事業所において若手が達成感を感じられるような試みをチェックしながら、良い提案は実現できるようにしていきたいと考えています。若手職員に限らず、職員の提案を吸い上げ、実現するということを市役所の活性化策として活用しています。

自治研ちばでも、銚子市職が震災の経験をレポートしていますので、私も時々活用しています。震災のときに、職員が生身の人間としてそれを感じ、家族とは連絡が取れない状況の中で、公務を遂行することにどういう気持ちを持っていたのだろうかと。言われてみれば、大事なことだと思い、良いアンケートだったと思っています。

このようなアンケートを次の震災対策として活かすことはもちろんですが、公務優先で職員が亡くなっては話になりません。家族の安否と公務の遂行という極限の状況の中で、どのようなことができるのかを震災対策・危機管理の中でしっかりと政策として入れないといけないと思います。職員の考え、思いを吸い上げ、政策として活かしていく、積み重ねがあって、若手職員のモチベーションになり、それがまちの活性化につながると思います。それが基本だと思います。

具体的には、観光をはじめ、農業や漁業の良いところを引き出しながら、銚子は水揚げ１番のまちにも関わらず、あまり活気がないのが正直なところです。銚子に水揚げされたものが、築地や東京など首都圏への販路が決まっていて、地元での６次産業とか直売の意識がなくて、日本一の水揚

げのまちにしては、活気がないと思います。周りの直売所や飲食店も寂しい。来年春に第一魚市場が完成するので、そこを起爆剤とし、港町に活気を呼び戻すことを目玉にしています。周りには、昔ながらの商店街、観音様のお寺もあり、街歩きには良いまちだと思いますので、まずはそこから元気にしていく。

公約にも挙げましたが、芸術家村というものを、観光の目玉として考えています。将来性のある若手の芸術家を招き（10名程度）、３年間定住してもらいます。市が補助を出し、面倒をみることにして、単なる美術館ではなく、実際の創作現場や作品も見てもらい、それを観光資源にすることを構想しています。

■千葉科学大学との連携

（佐藤）庁舎玄関に千葉科学大学の垂れ幕もありましたが、銚子市政と大学の連携にはどのようなビジョンをお持ちですか。

（越川市長）誘致の際、かなりの金額を出して誘致した大学ですので、地域への貢献という観点から、大学との連携事業もいろいろ考えています。既に大学の学生消防隊や警察支援サークル等に、地域支援や災害支援活動を行っていただいていますが、現在、産官学の連携ということで、COC事業を国に申請していまして、防災・郷土教育を積み上げた、人に優しく安心して住める地域創りを進めることとしています。

もう１つは、ジオパークというものがありまして、銚子の地質遺産を活かしてまちづくりあるいはまちの活性化につなげようとするものです。平成24年９月に日本ジオパーク認定を受け、大学の先生の提案から始まり、市や市民が一緒になって展開しています。ガイドによる銚子の大地の成り立ちや気象などの説明を聞きながら、屏風ケ浦、愛宕山、犬吠埼等を散策するというもので、大勢の人が参加しています。

また、好適環境水の入っている水槽が、銚子駅にあります。その水槽の中には、真水の魚と海水の魚が一緒に生息しています。好適環境水は、薬品処理を施したもので、銚子の養殖に活用できればと考えています。

■合併協議の破たん経緯とまちづくり

（佐藤）合併の話を伺えたらと思います。先ほど、少し話がありましたが、県内では合併をしなかった市町村が多いですが、旭市とかは合併しましたが。銚子市は結果として、単独でという選択をしましたが、その辺の経緯について少し聞きたいと思います。

（越川市長）正直なところ、銚子は合併したかったのですが、結果的にはできなかったことになります。旭市や近隣の町との合併の話も出ましたが、最終的には東庄町との選択肢しか残りませんでした。借金が少なかった東庄町と平成16年８月に合併協議会を立ち上げて協議をしましたが、結局は破綻しました。その原因は銚子市の借金の多さだと思います。科学大学の誘致にかかったお金が協議会の中では議論になったと聞いています。

広いまちを目指すよりは、小さくても輝くまちを目指すのが良いのではないかと。自転車で回れるまちで、財政的にしっかりすればそれで良いのではないかと思います。住民の密度としては、今のままで良いのでは、と思っています。

■銚子の特産品

（佐藤）最後の質問ですが、銚子の特産品などを、まちのPRを含めてお願いします。

（越川市長）銚子は、今、夏野菜が美味しいです。先日、市役所の駐車場で「食まつり～夏野菜編～」というイベントを開き、夏野菜の直売が行われましたが、スイカやメロン、なす、トマトなど、どれも美味しいです。特にメロンは糖度も高くて美味しいので自慢の一つかと思います。

魚も種類がたくさんあってとても美味しいですが、最近は生マグロが特に美味しいです。生のメバチマグロを水揚げするのは日本でも３か所しかないということです。ほとんどは冷凍したものを解凍して売りますが、銚子では生のままで水揚げ

して、普通の魚屋さんでも買えますので、その味は絶品だと思います。

後は、第一魚市場の近くに「さのや」という今川焼き屋がありまして、そこが大人気ですね。ボリュームもありますが、美味しさで賑わっています。

また、銀座通りという古い商店街にある「藤村ベーカリー」のアンパンも有名です。ほかにも地域の特産品、名産品のお店がたくさんあります。そういうところが自慢でしょうか。

■マイナス５℃というアイデア

（越川市長） 最後に、最近、「マイナス５℃」というのがありまして、若手の職員たちが銚子PRのキャッチフレーズとして、「マイナス５℃」というのを考え出しました。これは、夏の平均気温を東京と比べるとちょうどマイナス５度違うということでしたので、それを売り出そうよと。夏は涼しい銚子へということですね。今年はポロシャツにマイナス５℃を入れました。それから、今年は犬吠埼灯台の設置140周年ということで、あわせて入れました。

マイナス５℃については、あまり説明を入れていません。それは、あえて入れないことで、マイナス５℃は何ですかという関心を持ってもらうために、説明を入れないことにしました。夏場の天気予報を見ますと、他は30度を超えていますが、銚子だけは26度くらいです。冬場は逆に、５度ほど高いんです。これは売りかなと思いましたね。

（髙橋） だいぶ時間が経ちましたので、越川市長のご活躍と銚子市のさらなる発展を願いながら、インタビューはこの辺で終了したいと思います。長時間のご対応、ありがとうございました。